

組合の中でのフランスのアナキスト

こんどは、アナキストたちの、もっと正確には、いく人かのアナキストたちの、労働組合への浸透を見てゆくことにする。実際には、組合についての絶対自由主義者たちの態度は、均一のものではなかった。教義の純粹さに執着する、セクト的なある人々は、ほとんど日常的要求のみに専心していた大衆的プロレタリア運動によって、アナキストたちが吸収される危険があると、露わな猜疑の目を向けて考えていた。他の人々、アナルコ・サンジカリストたちは、そこに「浸透する」という、自己本位の、意図的な計画をもって、組合に加わることを渋らなかつた。しかし、さらに別の人々は、ただひとえに労働者階級のことだけを考へて、完全な無私無欲で、組合に入っていた。革命的サンジカリズムと呼ばれるものを創始したのはそれらの人であり、それは、日常的な階級闘争の実践を通じての、絶対自由主義的な連合主義の思想と、要求的な同業組合主義との共生であった。

なぜ組合へのアナキストたちの加入が行なわれたか？
一八八〇年ごろ、アナキズムは、フランスでは、壁にぶつか

っていた。それは、発展しつつある、そして次第に社会民主主義的改良主義の政治屋たちのいいなりになっていた労働者の世界から、首尾よく孤立していた。それは、一種のイデオロギーの象牙の塔に閉じこめられていた。あるいは、それは、テロリズム、爆弾の使用を示す婉曲な言い方、「事実による宣伝」という、少数者の行動を奨励していた。

クロボトキン、舵をとり直し、アナキズムをその無力な閉鎖状態からのがれるように仕向けた、最初の人々の一人である。「もはや孤立した行動を要求してはいない、そうではなく、同じ戦列で行動する人々を求めている、民衆とともにいなくてはならない」と、ある記事の中で彼は書いている。そして、第一インターナショナルの型の、しかしずっと強化した、大衆的なサンジカリズムの復活を推奨する。「巨大な同盟が幾百万のプロレタリアを一つにする」

クロボトキンにうながされ、アナキストの若いジャーナリスト、サン・ナザールから来たフェルナン・ペルティエが、一八八八年に、絶対自由主義誌『新時代』に、「アナキズムと労働

働組合」という記事を発表する。それは間もなく読者が見られるとおりのものである。組合は、彼によると、のちに、ポリシエヴィキ派の共産主義者たちにとって共産主義の召使であったのと同様に、「アナキズムの実践的な学校」である。

しかし、他のアナキスト、エミール・ブージェは、同じ意見ではまったくない。彼は、サンジカリズムはそれ自身で足りる、それは絶対自由主義の理論家が必要としない、組合は「特に」社会的な集団として見なされなくてはならない、と主張するのをためらわなかった。したがってここでは、ペルティエの記事のあとに、ブージェの殊に意義深い文書を掲げることにする。

アナキストたちの組合への加入は、重要な出来事である。それは、運動を再生させ、それに大衆の基礎をもたらし、レーニンが「経済主義」と呼んだものの中で混乱させられるどころか、それは運動に、ふたたび鍛えられ、新しい生き生きとした総合の中でふたたび自己を見出す機会を与えることとなる。

革命的サンジカリズムは、それにもかかわらず危険を伴っていた。それに対して、非妥協的なアナキストたちが警戒していたのはまったく間違っていたというわけではない。手近な目標のための協調的な行動は、時がたつにつれて、社会闘争を不毛なものとし、アナキストたちが社会民主主義の改良主義者たちのうちに告発していたものと似た、保守主義の中に社会闘争を陥れやすい、労働者官僚主義を分泌する方向に向かわなかったろうか？

この仮定を、フェルナン・ペルティエが、彼の論証に当たって避けなかった功績を持つことは、やがて見られるとおりである。先見の明をもって、彼は、一八九五年以来、組合の管理

が「権力になり」うることを、つまり官僚主義を生みうることを認めていた。そして、マラテスタは、異議を徹底して、一九〇七年に、アムステルダムのアナキスト国際大会において警告を発する。「官僚は、労働運動内において、議会主義としか比較しえない、危険である」

しかし、「純粋な」サンジカリズムのあまりに楽観的な信奉者、ビエール・モナットは、組合の官僚主義は、確かに、危険がないわけではない、しかし、サンジカリズムは、官僚を害のないものとするために、民主的な解毒剤をその自身の中に十分内蔵している、と反駁した。彼が正しくなかったことは、今日では明らかである。

フェルナン・ペルティエ 1867-1901

初め宗教学校で、ついでサン・ナゼール高校で学んだフェルナン・ペルティエ（一八六七—一九〇一年）は、民衆の下に加わるためにブルジョアであることを放棄した。ごく若くして、彼はジャーナリズムに身を投ずる。彼は、フランス労働党の一員となる。そして、一八九二年には、社会主義者大会において、サン・ナゼールとナントの労働取引所の代表であった。その大会で彼は、その場では突飛なこと、ゼネラル・ストライキの原則を可決させた。

一八九三年の初め、彼はバリーに定住することとなる。彼はほどなく、マルクス主義者から離れ、絶対自由主義思想を信奉する。『アナキストたちへの手紙』の中で、彼は書く。「われわれは……『政治屋』ではないのであり、いついかなる時にも叛逆者であり、真に神も主人も祖国も持たない人間であり、精神的な、ないし集団的な、いっさいの専制主義、つまり、プロレタリアートの独裁を含む、独裁と法律との、不倶戴天の敵である」

しかし同時に、ペルティエは、組合運動の中で闘うようアナキストたちに勧めていた。一八九五年に、彼は、労働取引所連盟の書記に任命され、そこで骨身を惜しまず活動した。一八九七年に、彼は、彼自身で印刷の組版作りに当たりながら、月刊社会経済誌『両世界の労働者』を創刊した。

ペルティエは、労働取引所を、労働者の組織として採用しうる最も完全な、大衆の基盤に最も近いもの、とみなしていた。彼はその中に、バクーニンによって予見された、「生産者たちの自由な提携」の芽と、同時に未来社会の基本的な機構、労働者コミューンを見ていた。不治の病いのために早世した彼は、革命的サンジカリズムについての古典的な遺著『労働取引所の歴史』を残した。

アナキズムと労働組合²³

私の知っている労働者たちが、いかに議会主義的社会主義の迷いから醒めていようと、彼らの考えでは、無政府思想とはすべてダイナマイトの個人的な使用を意味するので、自由社会主義を公然と主張するのをためらっているのと同様に、私は、かつてある意味で生みだされた偏見によって、組合から遠ざかり、ある時期、この機関が代議士志望者の真の養成場であったので、場合によっては組合と戦っている、多数のアナキストたちを知っている。サン・テチエンヌにおいては（私は確かな筋から聞いたのだが）、組合のメンバーたちがラヴァンショールを崇拜している。しかし彼らのうちの誰も、孤立した叛逆のために集団的な叛逆の用意を放棄したと見られるのを恐れて、あえてアナキストを名乗ることはない。一方、バリーでもアミアンでもマルセーユでもロアンヌでも、他の沢山の都市でも、アナキストたちは、この二年

ほどの間、組合を鼓舞している新しい精神に感嘆している。しかし、厳しい経験によって播かれたよい種子を芽生えさせるために、この革命的な分野にあえて入ろうとはしていない。ほとんど同程度に進んだ考えを持った、共通の目的によって、そして激しい運動の必要についての認識あるいは信条によって知的に結びついている、それらの人々の間では、不信の念が生き残っている、それが、あらゆる共同行動に対して主義として敵意を抱いている同志たちから組合員たちを遠ざけており、アナキストたちを、そこでは個人の自由の譲歩を強制されると彼らがいまだに考えている集団の形態から、遠ざけている。

しかしながら、工業ないし工場制手工業のいくつかの大中心地に始まった接近は、拡大することを止めない。ロアヌの一同志は、彼の町のアナキストたちが遂に同業組合グループに入ったのみならず、彼らはそこで精神的な熱心な勧誘活動によって、宣伝によって実際に有益な精神的権威を獲得した、と『新時代』の読者に最近語っている。ロアヌの組合についてわれわれが知ったこと、私はそれを、アルジェの、トゥールーズの、パリの、ボーヴェの、ツィロンの、等々の多くの組合についていうことができる。それらの組合は、絶対自由主義の宣伝を受けて、以前はマルクス主義の影響の下で聞くことも語ること拒否していた理論を、今日では学んでいるのである。さて、かつては不可能と見えたこの接近を分析すること、それが経過した局面をのべることに、それ

働者が、その廃止を要求したし要求してもいるような、そんな結果をもたらしたのである。

どこからそんな失敗が生まれたのか？ 組合は、急いでそれを研究した。しかし、著しく傷つけられた方法への信頼ゆえに改めてあまりにも動揺した、わかりやすい理由以外だと社会経済についてあまりにも無知な組合は、(労働時間の短縮が賃金の引下げを惹起したので)もし時間の規制に、労働の価格の規制がつけ加えられるならば、法律は完全なものになろう、と考えた。

しかし、深い失望の時が遂に来た。約束が改良主義的社会主義に力を与えたが、引き続いて、実態がその崩壊をもたらした。新しい法律が次々と現われた。それらは、生産者によりよい報酬を払うことか、その老年を保証することかを目的とするものであった。しかしその時、組合は、彼ら生産者によりよい報酬を与える物品は、彼ら消費者に次第に高く売られるようになったこと、賃金の相場が増大するにつれて、パンの、ブドー酒の、肉の、家賃の、家具の、一言でいえば生存の直接の条件であるすべてのものの価格が高くなることに、気づいた(社会主義的進化の中で重要なこの観察の名譽は、主として婦人に帰せられる)。組合はさらに(このことはリモージュでの最近の大会で明白にいわれたが)、要するに、退職年金はつねに賃金の天引きの産物であることに、気づいた。そして、ブルードンによってなされ、インターナショナルによって主張され、十三年前の

は、革命的結合を妨げていた不信の名残りを一掃することであり、隠しておきたい欲望の理論的な現われ、国家主義的社會主義を打破することである。組合が、社会的なと称する法へのいっさいの協力を放棄しようとした忠告(組合がそれまで多くの尊敬を払って聞いていた忠告にも反して、あらゆる反動に対して身を守るために、組合自身の判断で決意した)時期があった。それは、最初の改良が実施された時期であって、その改良について、人々は組合に対し、四年来、多くの素晴らしいことを約束していたのであった。

人々は組合に対し、改良の期待がいわば何年にもわたって組合を催眠状態におき、革命的目標から組合をそらせていたほどしばしば、「辛抱せよ！ われわれは、諸君に休息と学習の時間を与えるような形で諸君の労働時間が規制されることを獲得するであろうし、さもなければ諸君は、永遠に奴隷であろう」といった。しかし、少年婦人労働の保護法が組合に与えられた時、組合は何を確認したか？ 労働時間の減少に比例した、婦人の、少年の、組合員自身の、賃金の引下げであり、パリの、アミアンでの、アルデッシュ県での、ストライキないしロックアウトであり、法律を適用できないようにもし、労働の諸条件を悪化させもした、自宅での労働、ないし労働者搾取制度、ないし実業家による巧妙な組合わせ(回りとどい共同作業、交代制)の使用であった。一八九二年十一月二日の法律の適用は結局、婦人労働者や労働者

集産主義者の諸綱領によって認められ主張された、税金の影響についての見事な分析よりも、組合にとってずっと説得力のある、この経験的な教訓、それが、すべてが貧困状態を拡大させるために結びついている経済状況の中で、貧困状態を減らそうとすること、それはざるで水を汲もうとすることだ、と組合をなおも納得させなかったとしても、少なくとも組合員の精神の中にそれは、社会的な立法はおそらく、人々が彼らにいった万能薬ではないという、重要な思想を刻みこんだ。

しかしながら、この教訓は、社会主義の諸派が、それら自ら組合に政治への嫌悪を注入しなかったとすれば、われわれが確認している急速な進展を組合の中で惹起するには十分でなかったであろう。長い間組合は、社会党の、あるいはむしろプロレタリアートの弱さは、特に、おそらくはもっぱら、政治屋たちの分裂のためだ、と考えていた。市民Xと市民Zとの、かつてクロヴィス・ユードとフェルルによって汚名をきせられた「鼻眼鏡のトルクマード(包容力のないスベインの宗教)」とラファルグの言葉によれば「頼みならぬ社会主義者たちの連盟」の統率者との間の、不和が生じて以来、組合は二つに割れた。そして、たとえばメーデーのデモのように、共同行動を実施するとすれば、組合のメンバーたちは、指導者のスローガンにしたがって、相互に邪魔し合いながら進む、五つか六つの部分に分かれている。このことは組合に反省を強いた。そして、そこに原因に対する結果を見

て、組合は、解決不能の問題、社会主義者の統一⁶を解決しようとして、限らないものといえるエネルギーを浪費したのである。ああ！この妄想に到達するためになされた努力、同業組合的な環境の中で決して生活したことのないものなら誰でも、それと同様な考えを抱くことはできない。議事日程、議決、宣言、すべて、すべてが試みられた、しかし空しかった。協定が調印されると思われた時、確信によってよりもむしろ疲労によって討論が静まった時、一言がまた火花を再燃させた。ゲード主義者、ブランキ主義者、強硬派、ブルース主義者が激昂して立ち上がり、悪口を浴びせ合い、あるものはゲードを、あるものはヴァイヤンを、あるものはブルースを先頭にかつぐ。そして、新しい戦いが、ほとんど終わることなく再開されるために、何週間かつづくのである。

この世では、すべてに終わりがあつた。特に個人的な利害に属する政治と社会的利害に属する経済とを両立せよとする、自分たちの無意味な努力と、増大する自分たちの弱体化に疲れて、組合は結局、自分たち自身の分裂が政治屋たちの分裂よりもずっと疑問のある原因を持っていたこと、双方の分裂とも……政治に由来していたことを、理解した（遅れてではあるが、全然理解しないよりはましである）。それは、「社会的な」法が明らかに無効であつたことによつて、いく人かの社会主義者の議員の裏切りによつて（あるものたちはベルシー^{（パリ近郊の商業地帯）}の大きな取引に支持を与え、あるものたちは無責任

また、組合員たちに、同業組合組織は現にどういふものであるのか、どうなりうるのかを明らかにした。それについて彼らは、それまで偏狭な観念しか持っていなかったのである。

来たるべき革命が、それがあつたべきほどに素晴らしい、純粹な無政府共産主義を実現するとは、誰も信じていないか、希望してもいない。おそらく、アナキズム的な教育が完成される以前にそれが勃発するであろうという事実によつて、人々は完全に自分自身で自律するにはあまり成熟していないであらうし、さらに長い間、気まぐれな要求が彼らの中で理性の声を押し殺してしまうであらう。したがって（それをいうにはよい機会だが）、もしわれわれが完全な共産主義を説くとしても、共産主義が明日の社会形態になると考えるのは、確かなことでも分別のあることでもない。われわれが共産主義を説くのは、前進し、完成に、人間的な教養にできるかぎり近づいたためであり、一言でいえば、最大限の解放に到達する、来たるべき動乱の日を持つためである。しかし、耐えねばならない過渡の状態は、必然的に、宿命的に、集産主義的な牢獄でなければならぬのであろうか？すべての政治制度を消滅させ、生産と消費のためのみに限られた、絶対自由主義的な組織で、過渡的な状態が形成されることはできないのであろうか？そうしたもののが、すでに長年月にわたつて、当然のことながら、多くの人々の心を占めている問題であつた。

な辞職をして有権者に大きな被害を与えた、ストライキへの、特に乗合馬車のストライキへの、代議士や県会議員の介入の歟かわしい結果によつて、政治は二十五フラン^{（代議士の）}と勲章を獲得するための手段であるか手段となるものだと心得ている人々と、新聞との、ゼネラル・ストライキに対する敵意によつて、すでに大胆になつていた組合が、これからは政治的煽動は自分たちにとって無縁のものだ、経済に関するもの以外のすべての討論は、自分たちの学習計画から仮借なく追放する、組合はもっぱら資本への抵抗に専心する、と決めた時であつた。最近の諸例は、いかに速やかに組合がこの傾向をたどっているかを示している！

そして、この革命の評判は露わなものとなつた。新しいスローガン、もはや政治は無用だ！が各職場に波及した。多数の組合員たちが選挙崇拜に身を捧げている諸教会を見棄てた。組合の場合は、この時、いく人かのアナキストたちには、自分たちの理論を受け入れ受胎させるよう、十分に準備されている、と思われた。彼らは、議会主義的な保護から遂に解放され、今や自分たちの注意と仲間たちの注意を経済法則の学習にこそこうと努力している、組合を助けた。

組合への絶対自由主義者たちのこの加入は、重大な結果を生んだ。それはまず大衆に、個人的なダイナマイトなしで十分に樹立しうる理論、アナキズムの実際の意味を教えた。そして、思想の自然な脈絡によつて、加入は

さて、組合とは何か？それは、類似の職業的利害を研究し討議する人々の、主宰者を持たない、すぐさま解任しうる書記と会計係を役員として持つ、加盟と脱退の自由な、提携組織である。それらの人々、彼らは何者であるのか？生産者たちであり、すべての公共の富を作りだしている人々である。彼らは、結果するのに、協議するのに、行動するのに、法の承認を待ち受けているのであろうか？否、彼らの合法的な組合は、彼らにとつて、政府の保証によつて革命的宣伝をする興味ある手段でしかない。たとえば、いかに多くの組合が、公式の組合一覧表に掲載されておらず、これからも決して掲載されないことであらう。それらは、それらの議決するのに議会主義的な機構を用いるのであろうか？やはり否である。それらは討論する。そして、最も広汎な意見が法となる。しかしそれは、制裁のない、そして、もちろん、経営者に抵抗することにかかわる場合は除いて、その法は個人の承認に従属するものなので正確に施行される、法である。最後に、組合は、各会議ごとに、議事整理のための代表、議長を任命する。それらはもはや、習慣の結果によるのではない。なぜなら、一たび会議がすめば、この議長は、完全に忘れられているし、彼自身、同志たちが彼に授けた役割をしばしば忘れるからである。

選挙のための競争から離れた、ゼネラル・ストライキにあらゆるその結果とともに好意的な、アナキズム的に

運営される、経済闘争の実験室、組合は、したがって、集産主義の政治屋どもの不吉な影響とひとり匹敵しうる、そしてそれを抑制するにいたりうる、同時に革命的な、そして絶対自由主義的な組織である。革命が勃発するのであるう日、生産者のほとんど総体が組合の中に結集している、と今や想像してみよう。そこには、現行の組織を引き継ごうとしている、ほとんど絶対自由主義的な組織、事実上すべての政治権力を廃止した、生産手段の主人であるその各部分が、そのメンバーの自由な同意によって、至上権をもって、あらゆるその業務を自ら処理する、組織がないであろうか？そしてそれは、「自由な生産者の自由な提携組織」ではないであろうか？

確かに、異議はたくさんある。すなわち、連合的管理も権力になりうる、巧妙な人間は、議会主義的社会主義者が政治グループを支配したように、組合を支配するにいたりうる、といったものである。しかし、これらの異議は、部分的にしか、承認しうるものではない。連合評議會は、組合の精神においては、経済闘争を一般化し次第に手に負えないものとする必要が生じしめた、しかし革命の成功がなくもがなものとす、そして一方では、この過渡的な制度を生んだグループが、それが決して指導的な権威を獲得することのないよう、油断のない眼で監視している、過渡的な制度でしかない。他方では、役員をいつでも解任しうるものが、その役割や個人をとるにたならぬものとしているし、同志たちの信頼を維

持するには、役員が果たした義務は、あまりにしばしば十分ではないのである。それに、同業組合の組織は、萌芽状態のものでしかない。政治屋的専制をほとんど取りのけられたそれは、取り乱して歩き、第一歩を踏みだす子供のよう、独立への途上でよろめく。しかし、苦しみとさらに自由の果実が、この十年のうちにそれをどこに導くのか、誰が知っている。自由社会主義者がその努力を捧げなくてはならないのは、まさしくそれを独立に導くことのためである。

『ナルボンヌ取引所会報』の中に公表されたある公式議事録はいっている。「労働取引所の連合委員会、国家を、たとえそれが社会主義国家であっても、他の国家に置きかえることだけで満足する革命の無益さについて、プロレタリアートに教えることを使命とする」。この委員会は、と『ベルビニヤン取引所会報』の中に発表された別の議事録はいっている。「社会的変革に際して、自由な集団によって経済的機能を確保しうる、そしてあらゆる政治制度をなくもがなものとすることができ、組織を準備することに努めなくてはならない。その目的は、あらゆる形での権威の廃止であり、それは、労働者たちに保護から解放されることに慣れさせることを任務とする」。

このようにして、「組合員たち」は、今日では、絶対自由主義的な理論を聞き、学び、受け入れる状態にある。他方では、アナキストたちが、同業組合的な運動に

エミール・ブージュエ 1860-1931

エミール・ブージュエの活動家生活

ポール・ドレザルによる

青春

参加しつつ、彼らの独立の譲歩を強いられることを、怖れてはいない。前者が承認しようとし、後者が強化しうる組織、それは、その議決が自由な同意に由来し、グラヴィの言葉『未来社会』(二〇二ページ)にしたがえば、「あらかじめ決められた何らかの懲罰を条件にして、各個人にしたがうことを強制する、法も、規約も、規則もない」。私はくり返すけれども敵への戦いが始められた場合を除いて、いつでもその気になった時に各個人が見棄てる自由を持つ、一言でいえば、アナキズムの実際的な学校である、組織である。

したがって、自由な人々が組合に入るべきである。そして、彼らの思想の普及が、そこで労働者たちに、富の作り手たちに、彼らが自ら業務を処理しなければならぬ、来たるべき日に、単に既存の政治形態のみならず、さらに新しい権力のあらゆる再建の試みをも粉碎しなければならぬことを理解するよう、導くべきである。そのことは、権威主義者たちに、軽蔑を装っていた「サンジカリズム」への彼らの恐怖がいかに根拠のあるものであるかを、彼らの理論がいかに束の間のものであり、立証されうる前に消滅するものであるかを、示すであらう！

エミール・ブージュエは、アヴェロン県の、ロデスの近くで、一八六〇年に生まれた。公証人であった彼の父は、早世している。彼の母は再婚し、そのために彼の生活はいわば乱された。しかし、彼の義父は、当時のよき共和主義者であり、義理の息子のように論争好きで、闘争のための小新聞に書くために、下級官吏の地位を早くから失った。しかもその新聞は、自ら創刊したものであった。

エミールが、ジャーナリズムへの情熱を生じさせる勉強を始めたのは、ロデスの高校においてである。彼は、十五歳で彼の最初の新聞『共和主義的高校生』を創刊した。彼の先生たちがこの小新聞をどう扱ったかはいう必要もあるまい。

一八七五年に義父が死んだ。彼は、自ら生計を立てるために高校を離れねばならなかった。パリが彼を惹き寄せた。……服飾品の店で使われていた彼は、仕事が終わると、公開の集会や進歩的なグループを追い求め、求めはじめ、間もなく、すべてを革命的な宣伝に捧げるようになった。

しかしすでに、純粹に思弁的な観念論的なアナキズムは、際立った社会的感覚を満足させえなかった。一八七九年以来、彼は、パリで、俸給生活者の最初の組合創立に参加する。ブージェは、以後一貫して活動家生活をつづけ、たとえば彼は間もなく彼の組合に最も古い反軍国主義の小冊子の発行を決めたのであった。その小冊子を編集したのがサンジカリストであった、というのは無用のことであろう。そして、その小冊子は、その内容の熱烈さによっても、それが広く散りばめられている忠告によっても、今日でも刊行しえないものである、と私は付言しておきたい。

一八八二—一八八三年ごろ、パリで失業がかなりのひどさで猛威をふるい、それは、指物師の組合会議所が一八八三年三月八日に、青空集会をアンヴァリッドの広場で開こうと、失業者たちに呼びかけたほどであった。

もちろん、集会は警察によって素早く解散させられた。しかし、デモ参加者の相当数からなる二つのグループが形成され、一つは、エリゼへの道をとってたちまち追い散らされ、もう一つは、ルイズ・ミシエルとブー

エとともに、サン・ジェルマン大通りへと降りていった。フル通りでは、パン屋がいずれにせよ品物を奪われた。にもかかわらず、デモはつづけられ、かなりの数の警察力とぶつかったのは、モーベル広場についてからのことであった。警官たちがルイズ・ミシエルを逮捕しようとして飛びかかったので、ブージェは彼女を救いだそうとした。そして、彼もまた逮捕され、警察署に連行された。

数日後、強盗という不正確な嫌疑の下に、彼は重罪裁判所に送られた。ルイズは禁錮重労働十二年に処せられ、ブージェは、一般犯罪者用のムランの牢獄で過ごさなければならぬ刑、八年に処せられた。彼はそこに丸三年いた。そして、ロシュフォールの行動のあとで行なわれた大赦が、彼をそこからこの時代の先端に引きだした。牢獄は、格別、この活動家を思慮深くはさせなかった。

『ペナルじいさん』

ロシュフォールの『燈火^{ランタル}』を思い出させる、小冊子の形の『ペナルじいさん』の第一号が発行されたのは、一八八九年二月二十四日であった。それは、エベールの『デュシェーヌじいさん』を思わすやり方で書かれていたが、ずっとプロレタリア的な形式を伴っていた。

……ブージェの小さいパンフレット類は、成功をかちえたらしいが、今日では確かめることが難しい。『ペナルじいさん』が——ついで『社会的なもの』が——つ

づいていくかぎり、いくつかの労働者のセンターでは、プロレタリア的な実際の煽動活動が存在した。そして私は、彼のパンフレット類の消滅ののち、運動が皆無に陥った、トレラゼ、フルシャンボールのような、労働者地区を、十も二十もあげることができる。

パリでは、特に、フォーブル・サン・タントワヌの高級家具師たちの間では、『ペナルじいさん』が存続しているかぎり、要求的な運動がつづいていた。小さな火つけ役、同じ形式で書かれた『糊^{グル}壺^{ポット}』は、そこで、一八九一—一八九三年ごろにも発行されていた。

……ブージェのアナキズムは、何よりもまず、そして特に、プロレタリア的であった。『ペナルじいさん』の初めの号以来、彼はストライキの運動を賞揚した。五月一日の号は、メーデーに参加するように、「仲間たち」を勇気づけることにのみあてられていた。「メーデーは、方向を変えうる一つの機会である。そのためには、一八四八年二月のように、一八七一年三月十八日のように、われわれの兄弟が、兵隊が、上司に反抗することである。それはまったく長くからないであろう」

初期のもの一つ、それは人々がゼネラル・ストライキの思想から引きださうなものすべてを感じさせる。一八八九年になると、こう書かれている。

「そうだ、いやはや、今ではそれ以外にないよ、ゼネラル・ストライキだ！」

「もし石炭が二週間なかったらどうなるかね。工場は止

まるだろう、大都市にはもうガスがなくなるだろう、鉄道は居眠りするだろう」

「やっと、ほとんどすべての民衆が、体を休めるだろう。それは彼らに反省する時間を与えるだろう。彼らは、自分たちが経営者たちから汚ならしく盗まれていることを理解するだろう。そして、いかに、彼らが大急ぎで経営者たちを打ちのめすことはありうることだ！」

そしてさらに先の方にはこうある。

「したがって、ひとたび坑夫たちがみな興奮して沸き立つなら、ストライキがほとんど一般化したなら、何ともはや、彼らは自分たち自身のために辛い仕事をする必要を受ける必要があるだろう。鉱山は彼らのものだ、それは大金持たちによって彼らから盗まれていたものだった。畜生、彼らが自分たちの財産を奪いかえすように。そして、その意味で大騒ぎを始める、かなりずい、たくさんいい奴が現われる日にこそ、よろしい、ペナルじいさんの名誉にかけて、終わりの初まりが到来するだろう！」

偉大な小冊子の著者

しかし、労働運動がそこできわめて大きな位置を占めているにしても、社会問題のほかの諸様相、ブージェはそれらも、仮借ない批判のふりにかけている。ブルジョア社会のいかなる欠陥も、彼をのがれてはいない。大銀行「割引銀行」は破産したばかりであった。彼の記

事『独占者たち』はすっかり引用されるべきものであらう。

「統治者たち、肥った無用者と金融資本家たち、それは無頼漢と会社である。今日のように、人々は調査することを決定した。私は、八九年の制度を選ぶ。それは、よりよいものであった。そんなわけで、八九年の七月に、ベルティエール・ド・ソローヴィニイは、街燈に吊され、彼の仲間一人、フーロンは虐殺された。では、われわれは、ロスタイルドやシュネダーのやからを殺すために、ふたたびあの制度を実施するのに、何時、手をつけるのであらうか？」

外国での動乱にも彼は決して無関心ではいられなかった。

たとえばこんな風である。「傍らの仲間たちのうちでは」「陽気に動きまわっているドイツの野郎ども以上に、マカロニ野郎どもが彼らの大地主たちの頸に一発やっている。ブン屋の下劣な奴らにならずものと呼ばれている、セルビアとブルガリアの百姓たちが、お歴々を叩いている……彼らの落着きやのろまな様子にもかかわらず、ちょっとしたストライキをしぶやったイギリス野郎どもはいないが」

そしてついで「軍の卑劣漢ども」は、軍の、「兵營の汚ないもの」の批判であり、それは、軍と軍国主義についての徹底したカリカチュア——何というカリカチュア！——なのである。

に叫びに行った。「労働者階級の諸君、議会で過半数の代議士を送りたまえ、革命は既成事実にならないということとはなからう。これに対して、ブージェとその友人たちは応答した。『諸君の労働者会社（同組合）の中に、諸君の組合の中に、結集したまえ。戦場を奪取したまえ』」

この二つの方式は、自由社会主義者と権威主義的社会主義者とを、時には激しいやり方で戦わせたし、今日でも闘わせている。

その主張を名高いものとしたブージェは、論戦においても辛辣である。それを汲みとられるように。「あの聖なる選挙！ が行なわれたのは日曜日であった。もち、欠けていたのは候補者ではない。あらゆる好み、あらゆる色彩のためのものが揃っていた。牝豚はそこに仔の群れを見出さないだろうか？ しかし、いやはや、もし候補者の色やレッテルが変わるとしても、そこには変わらないものが一つある。つまり、人気取りのため！ 反動、共和主義者、ブーランジュ將軍支持派、社会主義者等々、すべては、民衆に、疲労で死なせることを約束している！」

そして、激烈なプラカードが、彼の論証をさらに発展させている。

弾 圧

しかし、多くの力をこめて進められた、そうした宣伝

「不当な裁判所にて」、当然それに値するものとしてそこで裁かれているのは、まさしく司法官であり、階級裁判である。

そして、それですべてではない。世論が奮起するたびに、それは記事となり、のみならず、特集号となった。なぜなら、ブージェは、特に、群衆にいわねばならぬことの宣伝の、確かな感覚を持っていた。

徴兵のための抽選は彼にとってよい口実であった。パリ・コミュニケーションや七月十四日の記念日同様に、プラカードはしばしば『ベナールじいさん』の特集号を伴っていた。少しでも世論を動かすものには、彼は何にでも関心を寄せていた。それは、ブージェが、何よりもまず、生来のジャーナリストであったからである。

そして、当時のすべてのアナキストが取上げていたので、彼にとっては特別なものではなかったにもかかわらず、ずっと個人的な形を帯びた論戦があるが、それは、議会主義と国家主義的なあらゆる機構についての彼の批判のうちにみられる。

ブージェと当時のアナキストたちがむしろ返したものの、それは、実際には、一方ではバクーニンといわゆるジュラ同盟に代表される自由社会主義とマルクスの権威主義的社会主義との、第一インターナショナルにおけるかつての闘いであった。

当時の権威主義的社会主義の最もよい代表者、ブージェの宿敵でよく彼が返礼をしたゲードは、いたるところ

は、確かに支障のないものではなかった。しきりと起訴が行なわれた。主幹たちが不運な目にあったが、ブージェ、彼もまた、時々、当時の政治犯監獄、サント＝ペラジに滞在することとなった。しかし、それは『ベナールじいさん』の発行を妨げるものではなく、仲間たちは順番に監獄まで原稿をもらいにゆくのであった。

それはまた、激しい動乱の時期でもあり、そして、動乱は孤立したものではなく、いく人かの人々を激昂させた、といわねばならない。仕上げのように、カルノー大統領の暗殺を伴う、一連の暴行が引きつづいた。

御用新聞によってあおられて、ブルジョアジーは、彼らが、まさしく、通り魔、と呼ばれた極悪な法、一連の弾圧法規の議会による議決の中にしか、救済が見出されないと考えたほどの、非常な恐怖に襲われた。

国中を通じて何百というほど行なわれた搜索に引きつづいて、逮捕が行なわれ、「三十人裁判」と呼ばれる大裁判が始まった。

ブージェと他の多くの同志たちは、国境を越えていわゆる、判事たちをのがれた。彼には亡命が始まり、一八九四年二月二十一日、第一次『ベナールじいさん』の最終号である二五三号が刊行された。

彼はロンドンに亡命し、そこでルイズ・ミシエールと再会する。しかし、彼が単に滞在するためにいったと考えるのは、われわれの同志をよく知らぬものであらう。同じ年の九月に、ロンドン版の『ベナールじいさん』の第

一号が刊行される。一八九五年一月までに、八号が刊行された。しかし、亡命は問題の解決ではない。ブルジョアジーはいくらか安堵する思いでいたのである。ブーリエは、彼に欠席判決をした法廷に出現するためにフランスに帰る。そして、「三十人裁判」の共同被告たち全員がそうであったように、無罪放免された。

これらの有為転変は、この活動家の熱意を何一つ変えなかった。彼を創刊者とする、『ベナールじいさん』につづく『社会的なものの』が出る。それは、幾多の理由から、一時的に、題号を継承することができなかった（それが継承されるのは、やっと一八九六年十月のことである）。

ブーリエのこの二つの新生児について、それらは宣伝の強度においてそれらの兄に等しい、という以外に何がいえよう。同じ勇気、いっそうの勇気。なぜなら、「極悪な法」が困難を増大させていたから。そして勇敢ささえあった。宣伝のための多数の小冊子、名高い『ベナールじいさんの暦』が始められたのもこの時期からであり、それらのうち特にブーリエが署名したもの、『ゲイド主義の変遷』は、政治屋的社會主義の小社会の中で、かなり評判になった。

ドレフュス事件が突発し、ブーリエは無関心のままでいることができなかった。彼は闘いに身を投ずる。しかしそれは、正義を要求するためであり、また、徒刑場に送られた、当時アナキストたちに特に当てられていたサ

リュ諸島で死に瀕している、アナキストたちのためでもあった。多数の記事によって、フランス・ド・プレサンセとの協力で書かれた小冊子、『極悪な法』によって、彼は首尾よく大衆の注意を惹くことに成功し、当時の政府当局者は、徒刑場の管理者によってあらかじめ巧みに仕組まれた、いわゆる暴動のためにとどめられていた人々のうち数人を、釈放せざるをえなかったのである。

『民衆の声』

われわれは一八九八年に到達する。労働総同盟（CGT）は、次第に大きな発展をとげ、つねにより強力になる社会的地位を獲得する。

トゥールーズ大会（一八九七年）は、ブーリエの働きかけの下に、労働者階級に新しい闘いの形態をもたらした「ボイコットとサボタージュ」についての重要な報告を可決した。

そして、最も親しく彼の着想であったものが登場する。彼は、当事者によってのみ編集される、闘争の機関紙を労働者階級に与えることを考えた。すでにそのための最初の希望はトゥールーズ大会で可決され、ついでレンヌ大会でふたたびとりあげられた。当時それは、同志たちの気持の上では、日刊紙とすることであった。しかしそれは、あらゆる面での財政的困難に逢着して、すぐに放棄しなければならぬ計画であった。

とはいえ、着想は打ち出された。そして、一九〇〇年

十二月一日に『民衆の声』の第一号が刊行されたのは、やはりブーリエの粘り強さのおかげであること、それをここで想起するのは適当なことであろう。

CGTの組織、連絡部の副書記に任命されたブーリエは、週刊紙発行の責任を委任された。彼の辛抱強い努力のおかげと、フェルナン・ペルーティエに助けられて、労働者階級は初めて自分のためのものである機関紙を与えられた。

……『民衆の声』のとじ込みによって、あらゆる面でのキャンペーン、職業紹介所に対する闘争、週休制、一日八時間労働、そこにエミール・ブーリエの名がいつもかわり、つねに闘いの前面にある、この上なくさまざまな不正に対する闘争のあとを、一つ一つ追ってゆくことは私にはたやすいことである。

彼の筆によって闘ったのは、全労働者階級である。しかしながら私は、これほどの宣伝の強烈さは、決して凌駕されたことはなかったというの誇張ではないくらいに、考えられ、具体化された、「徴兵のための抽選」や「メーデー」についての、立派な、忘れたくない特集号を喚起しなければならぬ。

私はまた、一九〇六年五月一日に実現された、一日八時間労働のためのキャンペーンを想起する。いかなる宣伝の科学——私には強すぎるとは思われない言葉——を彼が当時活用したかを知るためには、ブーリエの傍らでその時代を生きたければならない。彼のお気に入り、ヴ

イクトル・グリフェールが補佐していた。二年近くの間、彼らは、時にはあまりに自信を失いがちな労働者階級の気をそらさぬために、しょっちゅう新しいことを発見することができた。したがって、労働者階級が十分に主張を貫き通すことのできた場所、彼らが一日八時間労働を享受しているとすれば、その少なからぬものは、エミール・ブーリエに負うている、といっても誇張ではない。

彼が労働者の会議に及ぼした大きな影響を判断するためには、一八九六年から一九〇七年のCGTの各大会の記録をとりあげてみれば足りる。彼の報告、彼の演説、殊に各委員会内での彼の効果的な仕事は、労働組合運動が彼に負っているものの最も確実な保証である。私は、アミアンにおいて筆をとったのは彼であり、今日でもなお真のサンジカリズムの憲章として残っている動議は、部分的には彼の仕事であることを想起する。

彼が署名した多数の小冊子のほかに、多くの小さな労働者新聞への彼の協力と、誰かが将来フランスにおける労働組合運動の起源と方法を表面的ではなく研究しようとするれば、知らないでいることは不可能なほど内容のある研究、ユベール・ラガデルの『社会主義運動』の中に発表された、彼の偉大な記事を想起しなければならぬ。

『革命』、ヴィルヌーヴ・サン・ジョルジュ、驅逐

……ブージェは、全生涯を通じて、日刊紙に、それも、労働者階級の渴望のみを反映したプロレタリア新聞に、執着していた。それは、彼が他の同志たちとともに『革命』を創刊しながら企てたことである。グリフェールもいたし、モナットもいた。不幸にも、日刊新聞を運営するにはたくさんのお金が必要であった。そして、当てにしていた援助はこなかった。『革命』は、数カ月のうちに、発行を中止しなければならなかった。彼があれほど熱心に望んでいた仕事は崩壊するのを見るのは、彼の生涯の最大の痛恨事の一つであった。

私はほとんどここで筆を止めて差支えない。しかし、ドラヴェニユ・ヴィルヌーヴ・サン・ジョルジュ事件を想起しないわけにはゆくまい。あの悲惨な痛ましい一日が、クレマンソーが望んだことであったのは、時をへだててみれば確かなことと思われる。それはしかも、グリフェールの意見でもありブージェの意見でもあった。起訴はかなりの数の活動家に対して行なわれた。もちろん、ブージェもその中の一人であった。しかし、二カ月以上もコルベニーの監獄で過ごしたのち、告訴は取り下げられねばならなかった。もし裁判が行なわれたとすれば、汚辱の席はおそらく被告の席ではなかったであろう、というのは誇張ではない。

しかし、われわれよりも十年は年長のブージェの健康

には、そこに塗られた民主的粉飾にもかかわらず、夥しい悲惨と苦しみとが満ちているのである。

基本的な集団

同業組合的グループこそ、その成り立ちからいって、賃金労働者をうながす渴望に応える、唯一のセンターである。それは、利害関係の絶対的な一致に由来する、ただ一つの人間の集まりである。というのも、それは、それがのっとっている、そしてそれがその延長でしかない、生産の形の中に存在理由を持っているからである。実際には、組合とは何か？ 同業の絆に結ばれた、労働者たちの提携組織である。この同業の協同は、環境に応じて、ある時は、職種のずっと限られた絆によって、また、さまざまな職種の、しかしその努力は一つの共同の仕事に協力している、プロレタリアたちを包含する、二十世紀の巨大な工業化の中に、現われうるものである。

しかしながら、活動家たちによって選ばれた、あるいは状況によって強いられ、形がどのようなものであれ、組合への結集が「職種」に限られていようと、「産業」にひろがっていようと、目的の一致はつねに見られる。それは、

1 たえず搾取者に抵抗すること。搾取者に既得の改良を尊重するよう強いること。ついでまた、労働時間の短縮、賃金引上げ、よりよい衛生状態、等々といった、

は、すでに満足なものではなくはじめていた。時がたつにつれて、彼が理解していた形での闘争が当の人間をいくらか使い古した。彼にとっての休息は、生活のために、そして、病気が彼を打ちひしぐ日まで、ふたたび働くことであった。彼は、七十一歳まで、働くことを止めなかった。

エミール・ブージェ 組合とは何か？

所有、権威は、ある唯一の「原理」の異なった現われと表明であって、その原理は、人間の隷属の実践と是認の中に具体化されている。したがってそこには、視角の相違しかない。一面からみれば、束縛は、所有の犯罪とみなされるし、別の面からみれば、権威の犯罪と確認される。

生活の中では、民衆にとつての口籠、これらの「原理」は、圧制の制度の中に凝固してきたが、その制度の外観のみは、時代とともに変わった。現代においては、所有の制度の中で行なわれた修正にきたあらゆる転換や権威の行使の中にもたらされた修正にもかかわらず、それらの転換や修正はまったくうわべのもので、服従、拘束、強制労働、飢え、等々は、労働者階級の宿命なのである。

それが、賃金制度の地獄が痛ましい苦難である理由である。人間存在の大多数は、安楽や自由を奪いとり、そこで糊口をしのいでいる。そして、この地獄の中

部分的な改良や、細部に加えられるものであるにもかかわらず、それでもなお資本主義的特権に有効な打撃を与えそれを弱める、修正を要求しつつ、搾取を軽減しようとする。

2 組合は、社会の完全な転換への出発点となりうる唯一の基礎、資本主義の収用を、できるだけ早く、可能とするように、連帯関係の増大する協同を準備しようとする。あらゆる寄生の可能性が絶滅されうるのは、この正当な社会的返済(取)のこのことではない。その時にのみ、誰もはや他人のために働くことを強いられることはなく、賃金制度は廃止され、生産はその出発点においても目的においても社会的なものとなるであろう。その時、経済生活は、相互の努力の実際の集成であり、すべての搾取は、単に廃止されるだけではなく、不可能なものとなるであろう。

そのように、組合のおかげで、社会問題が、あまり先見の明のないものにも判然とするような、明確さと鋭さとして立ち現われる。同業的なグループは、できるだけはつきりと、賃金生活と主人との間の境界線を引く。このグループのおかげで、社会には、一方に労働者たち、盗まれた人々があり、他方には搾取者たち、盗人たちがいることが、明らかにになる。

組合の自治

組合は、それ以外の他の集団の形態よりもずっと優れ

たものなので、組合が、その加盟者たちが参加する活動から独立した、固有の活動をする、ということは起こらない。それ故にまた、意識的な組合員としての行動をするには、加盟者たちは組合の仕事に参加しなければならぬ。それは、彼らにとっては、財政的に組合の規定にしたがいつつ申し分ない組合員だと自任してみる以上に、この集団の力となるものに意をそそぐ、ということであろう。

確かに、規則的に分担金を払い込むことは適切なことである。しかしそれは、確信を持つ組合員が自分自身に対して、したがって組合に対して、しなければならぬ最も取るに足らない部分ではない。彼は事実、組合の価値は、その金銭保有高の効果よりも、その加盟者たちの結集したエネルギーの増殖にあることを、知らなくてはならない。

個人は、組合を構成する細胞である。組合員にとつては、普通選挙が尊重され、人間の人格が圧迫され弱められる傾向のある、民主主義的な環境の中に立ち現われる、気のめいるような現象のみが生じてくるわけではない。民主主義的な環境の中では、有権者は、譲歩の行為のためにしか、自分の意志を用いていない。彼は、彼が「代表」になつてもらうことを望む立候補者に、彼の「票」を「与える」よう運命づけられている。

組合への加盟は、似たようなことを何一つ強いることはない。この上ない屁理窟屋も、人間の人格へのいささはない。

る、白紙委任を受けとることを、強いているのであり、当選者は、彼に委任した人々のおそらくは相容れない意志によつて妨げられることすらもなく、この場合、それらの人々の反対がいかに際立ったものであつても、当選者への委任がつづいていくかぎり、効果はないのである。

したがって、組合の行動と政治の当てにならない仕事への参加との間には、比較できるものはないし、まして、混同するものもない。

組合、意志の学校

ソクラテスの「汝自身を知れ！」は、組合において「自分のことは自分でやれ！」という格言によつて補われている。

そのように、組合は、意志の学校として自らを任じている。その主な役割は、加盟員の意志に由来している。組合が提携の優れた形態であるとすれば、それは、組合が、プロレタリア階級の意志を自覚した行動の卓抜な形態、直接行動によつて効果的となった、労働者の力の凝縮であるからである。

ブルジョアジーは、国家の外的な介入のおかげで、自分で努力することなく、進歩が奇跡によつて成就されることを民衆に希望させつつ、民衆に諦念と忍耐を説くために、策謀をめぐらした。それは、いくらかばかげたものではない形での、幾千年にもわたる、過度に宗教的

かの侵害をもそこに見出すことはできない。過去も未来も、組合員は、変わらぬに、自律的であつたし、自律的なままでとどまつているのである。

組合に入りながら、労働者は、望むことにおいてもなしうることにおいても同じ資格の人々である同志たちと、いつでも取り消しうる契約を結ぶことししない。いかなる時でも、彼が表明しようとする意見、彼が参加することがある行為が、政治的投票を特徴づけ性格づけている、人格を停止させないし譲歩させる性格を持つことはないであろう。

組合においては、たとえば、管理の仕事をする役目の、組合評議會を任命する時、この「選抜」は「選挙」と比較すべきではない。こうした状況において習慣的に用いられる投票は、仕事の分担に到達するための手続きではない。そしてそれは、権威のいかなる委任をも伴つてはいない。厳格に定められた組合評議會の役目は、管理的なものではない。評議會は、委任した人々を決して無視することなく、彼らの身代わりになることも彼らに働きかけることもなく、自分の責任に属する仕事をする。

組合で行なわれるすべての決定についても同じことがいえる。それらすべては、限られた、個別の行為にとどめられている。それに反して、民主主義的な領域においては、選挙は、当選者が選挙民から、何について何のために、意のままに決定し行動することを可能とする。

な信仰の永続ではない。さて、指導者たちがこの当てにならない幻想を、やはり当てにできるといふものではない宗教的な幻影に置き換えようとした時、労働者たちは、懐柔されない、決して尻込みしない粘り強さで、組合という解放の機関を、人知れず実現していたのである。

この機関、意志の眞の学校、それは十九世紀のうちに形成され、発展した。この機関のおかげで、この経済的な組織のおかげで、労働者たちは、政治屋どもの病原体の伝染に抵抗することができ、あらゆる分裂の企てに挑戦することができた。

同業組合的な集団が、それらに課せられた禁止にもかかわらず形成されたのは、十九世紀前半のことであつた。迫害はそれらに対して仮借なく加えられたが、それらは組合を組織する大胆さを持ち、そしてまた弾圧を避けるために工夫をこらさなくてはならなかった。その時、大きな危険を冒すことなく結集するために、労働者たちは、相互扶助組織のような、当たり障りのない見かけで、彼らの抵抗のための提携組織を偽装したのである。

慈善のための集団は、ブルジョアジーに決して不安の念を与えなかった。彼らは、それらが単なる鎮痛剤でしかなく、いかなる資格においても、貧困という害悪への救済手段になりえないことを、十分に知っていた。慈善への希望は、被搾取者たちに、彼らの悲しい運命につい

てよく考えること、そこで解決を見出そうとすることをまさしく妨げるものである、眠気を催させる皮相な治療法である。それが、相互扶助的な提携組織が、指導者たちによってつねに寛大に扱われ、そうでなければ奨励された理由であった。

労働者たちは、それらの集団に認められた寛容さを利用することができた。彼らは、病気の時に救助し合う、引退施設を建てる、等々の口実の下に結集した。しかし彼らは、もっと力強い目的を追求した。彼らは、彼らの生存の条件を改善することに専念し、経営者の要求に抵抗することを狙った。彼らの戦術は、つねに首尾よく当局をだませたわけではなかった。当局は、経営者の通告によって先を越して、しばしば疑わしい相互扶助組織を追いつめた。

のちに、彼ら自身の多くの戦いと行動とによって、労働者たちが法に挑戦するのにながりの力があると自覚した時、彼らは相互扶助という仮面を脱ぎ捨てて、勇ましく、彼らの集団を抵抗の組織と名づけた。

表現的な明確な、立派な名称！ それには行動綱領が伴っている。それは、同業組合的なグループがなお萌芽的であったにもかかわらず、労働者たちが、政治屋たちに盲従しない、自分たちの利害をブルジョアジーの利害と結びつけない、反対にブルジョアジーに反抗し反対する必要性を、いかに感じていたかを証明する。

本能的に、それは、「労働者の解放は労働者自身の仕

事でなくてはならない」ことを宣言しつつ、国際労働者協会が明確な決定的な公式を与えることとなる、階級闘争の片言による表現であった。

この公式、あらゆる民主主義の残骸を追放した、労働者の力の輝かしい肯定は、すべてのプロレタリア運動を指導する思想として役立つこととなる。それは、一面では、民衆の中で芽生えつつある諸傾向の、堂々たる、明白な肯定でしかなかった。それを十二分に証明するもの、それは、それまで隠密のもので曖昧なものであった「サンジカリスト」運動と、第一インターナショナルの最初の宣言との間の、理論的、戦術的な一致である。

労働者たちは自分たち自身の力しか当てにできないという原則を提起したのち、第一インターナショナルの宣言は、確実な成果を獲得しうるのには自分たちの直接行動によってのみであることを示しつつ、プロレタリアートに必要な自律の宣言を完全なものにしている。それは、「労働者の、労働手段の、つまり、生活の源泉の所有者への経済的従属は、彼の政治的、精神的、物質的隷属の第一の原因であること、

「労働者の経済的解放は、したがって、あらゆる政治運動がその手段として従属しなければならぬ、大目標であること、……
「にかんがみて、
と付け加えている。

それゆえ、第一インターナショナルは、労働者の自律

をはっきりと宣言することだけに甘んじたのではない。それは、政治屋的な煽動や政府の手での修正が、経済的な現実を忘れさせるほど労働者たちを感動させるものであるはずがないことを肯定して、その宣言を完全なものにしたのである。

現在の労働組合運動は、第一インターナショナルの運動の論理的継承でしかない。一致は絶対である。われわれがわれわれの先輩の仕事をつづけるのは、同じ平面においてである。

ただ第一インターナショナルがその前提を提起した時、労働者の意志はまだあまりにも先見の明がなく、プロレタリアートの階級的自覚は、逸脱することもなしに経済面を優越させるためには、あまりに発展していなかった。

労働者階級は、民衆の中に立身出世する手段をしか見ず、民衆を讃美し、眠らせ、裏切る、けがらわしい政治屋たちのさまざまな影響を耐え忍ばねばならなかった。一方、彼らはまた、国家主義的な無用の長物に過度の重要性を結びつける、民主主義のしみついていた、律気な清廉な人々によって引ずられるままとなっていた。

それらの要素の二重の影響で、(一八七一年の大殺戮に始まる)現在の時期において、労働運動はさまざまな方向に引つ張られ、長い間無為の日を送っていた。一方では、陋劣な政治屋たちは政府に盲従させるために組合を飼い馴らすよう努力していた。他方では、各派の社

会主義者たちが自分たちの傾向を組合の中で優越せようと専念していた。したがって、両者とも、組合を、「利害の集団」から「姻戚の集団」に変えることを狙っていた。

組合運動は、あまりにも頑強な根を持っている。それらの別々の努力がその発展を阻止できなかったためには、組合はあまりにも不可避な必要のものであった。今日では、組合は、「抵抗の組織」、開拓者、その最初の集団の仕事、第一インターナショナルの仕事をつづけている。確かに、諸傾向が明らかになったし、諸理論がはつきりしてきた。しかし、十九世紀の組合運動と二十世紀の組合運動の間には、絶対的な一致がある。一方は他方から由来している。そこに、渴望と行動との増大する結合の中で開花している、プロレタリアートの次第に調整化されてゆく力の表示、つねにより意識化する意志に向かう上昇、論理的な生長がある。

現在の仕事

組合の仕事は、二つの目的を持っている。それは、倦むことのない厳しさで、労働者階級の現在の諸条件の改善を追求しなくてはならない。しかし、この過渡的な仕事に取りつかれたままではいけないのではなく、労働者階級は、完全な解放への最初の行為、資本主義の収用を可能なもの、身近なものとするよう専心しなくてはならない。

現在においては、組合の行動は、部分的な、段階的な改善の獲得を狙っている。その獲得は、目的であるところか、より以上を要求し、資本主義から新しい改善を強奪するための、手段としかみなされえないものである。

組合は、その加盟者の抵抗に正確に比例して、抵抗の前線を経営者に提起する。組合は、搾取者の欲望を抑制する。組合は経営者に、孤立した賃金生活者が耐え忍んでいる個人的契約にもとづくものよりは峻厳でない、労働の諸条件を尊重することを強いる。資本で身を固めた経営者と皆から離れたプロレタリアとの間の、あの片手落ちの契約を、組合は集団契約に変える。

そして、組合は、使用者に反抗する。かなりの範囲にわたって、夥しい失業の痛ましい結果を阻止しながら、手をさしのべて憎むべき「労働市場」を緩和する。資本家に労働者の尊重を強制し、その力に応じて、資本家に対して特権の名残りの放棄を要求する。

部分的改良の問題は、同業組合的な組織の中に、不和を持ち込もうとするための口実として役立った。諸思想を混同してしか暮していない、組合がその人格とその危険な介入に対して持つ激しい嫌悪に心を痛めている政治家たちは、経済的な分野の中に、選挙民たちをだますための、言葉の争いを運び込もうとした。彼らは、労働者を改良派と革命派とに分類しつつ、不和の種をまこうとし、組合を二つの陣営に分裂させようとした。革命派の信用をいっそう失わせるために、彼らはそれを「すべて

か無の信奉者」と呼び、現在でも可能な改善の敵対者であるといわねばならぬ主張したのである。

それらのばかげた言行は、彼らの愚かさを示したただけであった。原則によってか戦術によってか、七フランのかわりに六フランを稼ぎながら、八時間のかわりに経営者のために十時間働くことに固執しようとするものは、その精神状態ないし渴望がどのようなものであれ、労働者ではない。

しかしながら、それらのつまらない間抜けどもを殖やしながら、政治家たちは、労働者階級を経済組織から遠ざけ、自分たち自身の業務を果すこと、つねにより以上の安楽と自由とを獲得するために自ら活動することを、労働者階級に思いとどまらせようとした。彼らは、組合の中で、政治がそこから除去されて以来消滅していた、無益な、混乱させる討論を再生させつつ、組合を解体させるために、中傷の毒を当てにしていたのである。

こうした画策に口実の見かけを与えるもの、それは、組合が、経験による怖ろしい教育のおかげで、政府の介入にもはや期待を持たず、その介入に対して正当な不信の念を抱いていたことである。組合は、その役割が資本の憲兵であることにある国家が、本能的に、経営者の味方をしがちであることを知っている。したがって、合法的な方法で改善が行なわれた時、組合は、蛙の食欲さをもって、釣針を隠している赤いぼろぎれの上に身を投ずることはない。組合は、慎重さをもって、改善を受け入

れる。改善の実施を力によって強制するためには労働者たちがかかなり組織されていなければ実現しないものであるだけに、慎重さは一層ますます適切なものである。

組合は、その害毒をしばしば確認しただけにまします、政府の贈り物を用心している。したがって組合は、同業組合的な集団の仕事に対抗しそれを阻害するためにはのみ提案された組織、労働最高審議会や労働諸審議会のような「贈り物」を、明確に無価値のものと認めていた。同様に組合は、労働者の抵抗の能力をそぐことを最も明白な結果とする、ストライキの規制や義務的な仲裁に感激しないよう大いに警戒していた。同様にまた、労働者組織に与えられる法的な能力や公的資格は、価値あるものを組合に何一つもたらさなかった。なぜなら組合はそこに、社会闘争の対立よりも金銭の訴訟沙汰を優越させる、資本主義の土俵に組合を引きずり込むために、組合に社会闘争の場を放棄せようとする欲求を見るからである。

しかし、組合が自分たちに対する政府の好意に深い不信の念を持っていることから、組合が部分的な改良を獲得することを嫌うということはない。組合はただ、実際の改良を望んでいるだけである。それが、権力の恣意による改良を待つかわりに、組合が自分たちの直接行動によって力づくで改良を奪い取る理由である。

もし、実際そう行なわれているように、組合が要求した改善が法に従属しているとしても、組合は、夢みた改

良に好意的である過半数の出現なしに何世紀もつづけられうる見識、特に委任した代議士を議会に送り込もうとすることはせずに、公権力への外的な圧力によってその獲得を追求する。

望ましい改善を資本家から直接奪いとらねばならない時、同業組合的な集団が彼らの意志を表明するのは、やはりたぐいましい圧力によってである。つねに直接行動の原則がかかげられているとはいえず、彼らの手段は多様である。場合によって、彼らは、ストライキを、サボタージュを、ボイコットを、貼札を用いる。

しかし、獲得された改善がどのようなものであれ、それは、資本主義的特権の弱体化となるものでなければならず、部分的な収用でなくてはならない。

そのように、政治家どもの言葉の上の論争に満足しない時、組合の行動の方法と価値とを分析する時、「改良派」と「革命派」との精妙な区別は消え失せ、人々は、実際に改良主義的な労働者たちのみが革命的サンジカリストであると、結論するように導かれる。

未来の構想

日常的な防禦の業務を越えて、組合は未来を準備することを仕事とする。

生産者のグループが、新しい社会の細胞にならなくてはならない。ほかの基礎にもとづく実際の社会変革を考へることは不可能である。したがって、生産者たちが、

- 12 Sati Carnot (1837—1894) イタリアのアナキスト、カセリオによって、リオンで暗殺されたフランス共和国大統領。
- 13 《極悪》な法は、アナキストのテロ行為を抑えるためのもので、オーギュスト・ヴァイヤンの事件ののち議決された。Auguste Vaillant (1861—1894) アナキスト、親代の職人、二十の職業を営んだ。一八九三年十二月九日、下院の議場に爆弾を投げ、ギロチンにかけられた。
- 14 Louise Michel (1830—1905) 教師、懐柔されなかったアナキストの闘士。彼女は一八七一年のバリ・コミューンに参加し、流刑に処せられ、のち特赦された。
- 15 Victor Griffuelhes (1874—1923) 元製靴工、初めブランキ主義者、ついで革命的サンジカリストとなる。一九〇二年から一九〇九年まで CGT の書記長。
- 16 アミアン憲章（一九〇六）、それによって革命的サンジカリズムは、政党に対する自己の独立を宣言する。
- 17 Hubert Lagardelle (1875—1908) 弁護士、まずゲード主義者、ついで革命的サンジカリズムの理論誌『社会主義運動』（一八九九—一九一四）の創刊者、注目すべき書『フランスの社会主義』の著者。ベタン元帥の關係で終わる。
- 18 Pierre Monatte (1881—1960) 印刷所の校正係、アナキズム誌『新時代』に協力、ついで革命的サンジカリストとなり、一九一四年以前の CGT の組織委員会に参加、一九〇九年から一九一四年まで、『労働者の生活』誌を発行。一九一三年にフランス共産党に加盟、『ユマニテ』紙の社会面の編集者となる。彼は一九二四年十一月に党から除名される。そして彼は、サンジカリスト同盟の機関誌『プロレタリア革命』を創刊する。『革命的サンジカリズムと共産主義、ピエール・モナット文書』（一九六九年）を参照せよ。
- 19 一九〇八年に、Georges Clemenceau (1841—1929) 内閣によって、ドラヴェーユとヴィルヌーヴ＝サン＝ジョルジュで、ストライキが血の中で弾圧される。それに引き続いて、CGT の指導者たちが逮捕された。
- 20 一九二一年に、(バリ南郊パレンソの) ロゼール村で、この貧しい人の樞車が、エミール・ブージュをその墓所へと運んだ。ピエール・モナット、モリス・シャンペラン、その他数人の人々がしがたい、その中に私(ゲラン)もいた。
- 21 『組合』（一九〇五年）からの抜萃。

彼らが責任を負わねばならない、彼らのみが満足すべき結果に導きうる、所有の奪取と再組織の仕事に備えることは欠くことのできぬことである。

われわれがしようとしているのは、政治革命ではなくて社会革命である。そこには二つの異なった事象と、一方から遠ざかり、他方へと到達する戦術とがある。

- 1 J・メトロン『ラヴァンショールとアナキストたち』前掲書、を参照せよ。
- 2 一八九五年十月二十日に書かれた。一八九五年十一月二十八日の『新時代』紙に発表。
- 3 多分『経済的矛盾の体系』（一八四六年）の第七章と、おそらくはまた『税金の理論』（一八六一年）の第三章にかわりがある。
- 4 Clovis Hugues (1851—1907) フランスの政治家で詩人。Ernest Ferroul (1853—1921) 医者、ナルボンヌの社会主義市長、代議士。
- 5 Paul Lafargue (1842—1911) 両親はフランス人でキューバで生まれる。医学生、まずブルドンの絶対自由主義者、ついでカール・マルクスの弟子で婿、彼の娘ローラと結婚する。インターナショナルの会員、バリ・コミューンに積極的に参加する。バクレーンの支持者たちと闘うための、スペインでのカール・マルクスの代表者。一八八〇年に大赦される。一八九一年に代議士に選出される。ジュール・ゲードとともに、フランス労働党を創立する。いくらか絶対自由主義的な情熱を帯びたベンフレット『怠惰の權利』の著者。彼は、『冷酷な老年の前に』一九一一年十一月二十六日、妻とともに自殺する。
- 6 社会主義者の統一については、ローザ・ルクセンブルク『フランスにおける社会主義』（一八九八—一九一二）、一九七一年、ピエール・ベルフォン、へのダニエル・ゲランの序文参照。—Edouard Vaillant (1840—1915) フランスの偉大な革命家の一人、まずブランキ主義者、一八七一年のコミューンのメンバー、死刑を宣告されたのちに大赦を受ける。《神聖同盟》の中で終わりを迎える。
- 7 この言葉によって、ベルティエは、国家主義的な社会主義、を理解していた。
- 8 Paul Desautels (1870—1948) 元精錬工、アナキスト、革命的サンジカリスト、『新時代』誌に協力し、のちフェルナン・ベルティエの後を継いで、一九〇七年まで、労働取引所連盟の書記に選出される。ついで革命的な出版者、書籍販売業者となる。『民衆の叫び』一九三二年七月二十九日、八月五日号から抜萃した文書。
- 9 ルイズ・ミシェルについては注14を見よ。—Henri Rochefort (1844—1918) 諷刺的小冊子の著者、彼の週刊紙『燈火』の中で第二帝政に激しく反対する。一八七一年のバリ・コミューンの代議士。
- 10 Joseph Foulon (1717—1789) 財政監査総長、バスティーユ占拠の直後、吊され、斬罪になる。
- 11 『民衆のベナルじいさん』の題号の下に、沢山のプラカードやビラが二万部以上も刷られた。私はそこから三十以上も引用しうる。(ポール・ドレザル注)